

みづの上日記

樋口 一葉

内容理解

この文章で作者は、日常をつづる中で、人々との交流で生じた自らの心持ちを語っている。本文を読み直しながら、空欄に入る適切な言葉を補ってみよう。

五月二日 夜、禿木、秋骨の二人が来る。二人とも笑いながら、

・「今夜は、ごちそうしてもらおうと思つて来たんですよ。さあ、何を食べさせてくれるかな。並みのもてなしじゃあダメですよ。」と言う。

「こういうことですか。」

戸川氏は、懷から雑誌を出し、朗読しようかと平田氏を見て言う。『めざまし草』巻四。ああこれは、私の『たけくらべ』の批評が載っていると、新聞の¹で知っていたけれど、微笑んでいると、

「今日、大学で上田敏氏がこれを見せて、ほらご覧なさい、これこれの評があつて、とどめのように、鷗外・²の批評。さらにその朗読。もううれしくて、早速帰りに、本屋で買つて平田君の下宿へ行つて見せると、彼は一目見て、涙したんだよ。早くあなたに見せて、喜びをも妬みをも言おうかと、二人して訪ねて来たんです。さあ、読んでみて、私が読もうか、平田君が読もうか。」と、喜色満面の戸川氏。

「³の神というべき鷗外が、『我はたとへ世の人に一葉⁴のあざけりを受けんまでも、この人にまことの⁵といふ名を贈ることを惜しまざるべし』と言ひ、『作中の文字五、六文字づつ、今の世の評家、作家に技倆^{ざりやう}の⁶の靈符として飲ませたきもの』と言われたら、我々文士にとつてもう死んでもいいという言葉でしょう。どんなにかうれいでしょう。ああ、うらやましい。」と、大喜びで二人は帰つていった。

・こうした批評は、色々な新聞・雑誌で賑やかに語られ、「日本」新聞では、「ただ一行読みて

語句

この文章の中で使われていた次の言葉を使って、短文を作ってみよう。

崇拜（二九二・二）

取り沙汰（二九三・一）

不徳（二九三・六）

反故（二九三・八）

は驚き嘆じ、二行読みては打ちうめきぬ」と書かれていたと、国子が聞いてきて、なんとも驚きあきれるほどの評判ですね、と喜び、また悲しみもした。それは、「⁷ 槿花^{きんか}の一日の⁷」を嘆いてのこと。世間は文学をもてはやし、ちよつとした文言が地方まで伝わり、様々な評判、よくないものも増える。川上氏との関係を種に、人は妬み憎んだりする。気にしないとはいえ、不徳のするところと、嘆かわしく思う。

・訪ねてくる人は、女子だという物珍しさに集う。だから、たいした作品でなくとも、「⁸ 今⁸よ、紫よ」ともてはやす。そんな批評は、疵^{きず}があつても見逃し、良きところには言及しない。ただ、うまい、⁹ ⁹ だと言うばかり。なんとも不思議なことですね。

五月二十四日 斎藤緑雨氏が初めて我が家を訪れる。いろいろ話す。

二十五日 田中みの子を訪ね、^{なからみ} 帰りに半井氏を訪ねる。三崎町で執筆中、会わずに帰る。

二十七日 夕刻、平田、戸川の二氏来て、いろいろ話す。

二十八日 田辺たつ子氏を訪ね、いつものように話す。十二時過ぎ帰宅。木曜で野宮氏来る。安

井氏の家から昇給祝いの¹⁰ ¹⁰ が届く。『新文壇』の編集長鳥海嵩香氏、長く話していった。戸川残花氏、博士何某との縁談を持つてくる。

二十九日 斎藤緑雨氏が訪れ、誰かいるので帰った。

二十九日 横山源之助氏が来訪。斎藤緑雨氏来訪、そつと次の間に通し、源之助は帰った。

主題

この作品で作者はどのようなことを描こうとしたと思われるか、次のことに着目して、百字程度でまとめてみよう。
〈着目点…作品の批評に対する筆者の心情〉

発展

次の中で興味を持った事項について、図書館の書籍やインターネットなどを使って調べてみよう。

・『めざまし草』の鷗外の批評とは、どのようなものか。

・樋口一葉はどのような生涯を送ったのか。

・正太夫（斎藤緑雨）とは、どのような人物か。

100